

巻 頭 言

Editorial

ディケンズ，ドストエフスキー，バットマン

Dickens, Dostoevsky, and Batman

日本支部長 佐々木 徹

Toru SASAKI, President of the Japan Branch

ディケンズとドストエフスキーというのは古いネタだが，最近またこの問題が妙な脚光を浴びて，ロンドンの「タイムズ文芸付録」の4月12日号に6頁におよぶ記事が掲載された．この雑誌(新聞?)でこんな長い記事はちょっと見たことがない．よほどニュースとして価値が高いと判断されたのだろう．もっとも，これは二人の小説家の文学そのものではなく，学術論文捏造にかかわる記事である．ことの根幹にあるのは，ロンドンを訪れたドストエフスキーにディケンズが「私のなかには二人の人間がいる」と語ったというエピソード．2002年冬の「ディケンジアン」に掲載された論文ではじめて明らかにされたこの逸話を同誌の編集者マルカム・アンドルーズは自著(2006)に用い，マイケル・スレイター(2009)もクレア・トマリン(2011)もそれぞれのディケンズ伝に利用した．ところがこの興味深い会見は根も葉もないでっちあげだった．いかにしてそれが露見したか? ミチコ・カクタニが「ニューヨーク・タイムズ」でトマリンの伝記を書評してこの逸話にふれ，アメリカのドストエフスキー研究者たちが疑問を抱いたのである．さすがに「タイムズ」の威力はすごい．捏造の指摘があった後，「ロンドン・レビュー・オブ・ブックス」の書評がこの件にふれるとトマリンはいささか見苦しい反論を寄せ，だまされたのは自分だけでなく，権威ある研究者のアンドルーズやスレイターも同じだと弁解した．(何を隠そう，筆者も間拔けな犠牲者の一人で，2008年の「ディケンジアン」掲載論文でこのエピソードを使ってしまったのだった．)「文芸付録」の記事はこの捏造事件を徹底的に追求し，犯人がいろいろな名前をかたって多くの学術雑誌に投稿していたことをつきとめている．それによると，時には別名で自分の論文を批判しているのだから恐れ入る(「私のなかには二人の人間がいる」とはこのことだ!). さらに，7月10日号

の「ガーディアン」には犯人のインタビューが掲載された。どうやらこの人物は大学のポストにつけなかった腹いせをしたらしいのだが、なんとも味のわるい話である。(スレイターの伝記のペーパーバック版ではディケンズとドストエフスキーの対話は削除されている。確認していないが、トマリンの本にも同様の処置がとられているのであろう。)

バツと話は変わる。最近クリストファー・ノーラン監督の『バットマン』三部作をようやく通して観た。おどろいたことに、第三作はディケンズの引用で終わる。バットマンの葬式でゲアリー・オールドマン扮するゴードン警部が『二都物語』の最後を朗読するのだ。不思議に思って調べてみると、ノーランは脚本の共同執筆者である弟に促されてこの小説をはじめて読み、これがダーク・ナイトの終焉にぴったりだと思ったらしい。階級闘争云々に感心したというのはいただけないが、ディケンズの「情に訴える部分と演劇性に心を動かされた」というのは筋がよらしい。やっぱりノーランはえらい。いま帝国劇場で上演中の日本語ミュージカル版もそういうところをうまく汲んで大ヒットして、シドニー・カートンがジャン・バルジャンと同じくらいわが国でもなじみのある名前になればよいのだが。